博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　五十嵐　孔一　印

学位申請者　　高橋　春人（たかはし　はると）

論　文　名　　近世朝鮮語の過去を表す接辞について

【審査結果】

高橋春人氏から提出された博士学位請求論文“近世朝鮮語の過去を表す接辞について”に対し、論文審査と口述による最終試験(公開審査)の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士(学術)の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、最終試験は 2024 年 2 月 16 日(金)14 時 30 分から約 3 時間をかけて、対面で実施された。審査委員会は、五十嵐孔一(主査)、南潤珍(主任指導教員)、風間伸次郎、趙義成、河崎啓剛(東京大学准教授)の 5 名から構成された。

【論文の構成】

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章　序論

第 2 章　研究対象および研究方法

第 3 章　各形式の分布

第 4 章　分布 1：会話文平叙終止形の‘-더-(-te-)’と‘-앗-(-as-)’

第 5 章　分布 2：非会話文平叙終止形の‘-Ø-’と‘-더-(-te-)’

第 6 章　分布 3：接続形‘-니(-ni)’、間接話法の平叙終止形、疑問文終止形、連体形の用例分析

第 7 章　‘-앗-(-as-)’を含むその他の形式について

第 8 章　結論

【論文の概要】

本論文は近世朝鮮語における動詞の過去を表す形式の用法を考察し、その使い分けについて論じたものである。調査に当たっては18世紀中ごろから末にわたる時期(英祖・正祖代)の文献資料を選定し、接辞なしの形(または'-Ø-'の形)，接辞'-더-(-te-)'、'-앗-(-as-)'を主な研究対象の形式として扱っている。

これらの形式に対し、次の三点を取り上げて議論している。

①古いテンス・アスペクト体系と新しいテンス・アスペクト体系のどちらが使用されているか。
②各形式が混在しているように見える場合，使い分けがあるか、あるとすればどのように使い分けられているか。
③'-더-(-te-)'の意味の変化は生じているか。

各章の内容は以下の通りである。

第1章の序論では研究の目的、本論文の構成と使用する用語を明らかにし、文献資料と選定基準を詳細に述べている。その選定の基準に沿った資料として、刊行資料には宗教書類、教化書類、歴史書類、訳学書類を、筆写資料には実記および歴史書、紀行文および燕行録、諺簡類をあげている。

第2章では、まず研究対象となる近世朝鮮語の諸形式について、中期朝鮮語のテンス・アスペクトを概観した上で述べている。また、近世朝鮮語の過去を表す接辞の付いた形を表に一覧し、平叙文終止形2種、接続形、連体形をあげている。表中の平叙文終止形の2種にはそれぞれ下称形と上称形、接続形には'-니(-ni)'、連体形には'-ㄴ(-n)'が研究対象として示されている。

加えて、近世朝鮮語のテンス・アスペクトを論ずる際に問題となる点をあげている。中期朝鮮語では'-Ø-'と'-더-(-te-)'が過去を表すが、近世朝鮮語では'-Ø-'がどの程度使用されているのか調べる必要がある。'-앗-(-as-)'と他の形式が混在しているように見える場合は互いにどのような違いがあるのかが問題となる。そして、'-더-(-te-)'に関しては意味の変化と、主語の人称との関わりが考察の課題となる。

第3章では、テンス・アスペクトに関する「説明」と「語り」の区別を参考にして会話文とそれ以外に分け、終止形、接続形、連体形に現れる'-Ø-'、'-더-(-te-)'、'-앗-(-as-)'の諸形式の分布ついて調査している。結果は次の通りである。

①平叙文終止形では‘-았-(-as-)’が会話文で使用され、非会話文(地の文など)ではほぼ使用されない。
②また、平叙文終止形で‘-Ø-’は非会話文で使用され、会話文でほぼ使用されない。
③つまり、平叙文終止形においては‘-았-(-as-)’と‘-Ø-’の分布が会話文と非会話文で対照的である。
④このような‘-았-(-as-)’と‘-Ø-’の分布の偏りは、疑問文、間接話法の平叙終止形、接続形‘-니(-ni)’、連体形では見られない。
⑤‘-더-(-te-)’は全ての場合に使用される。

この‘-았-(-as-)’と‘-Ø-’の分布に基づき、次の3種が区別される。

分布1:‘-았-(-as-)’が使用され、‘-Ø-’がほぼ使用されない。
→会話文の平叙終止形
分布2:‘-았-(-as-)’が使用されず、‘-Ø-’が使用される。
→非会話文の平叙終止形
分布3:‘-았-(-as-)’と‘-Ø-’の両者が使用される。
→疑問文の終止形、間接話法の平叙終止形、接続形‘-니(-ni)’、連体形

第4章以降ではそれぞれの分布における各形式の意味や用法を論じている。まず、第4章では会話文の平叙終止形における‘-더-(-te-)’と‘-았-(-as-)’について述べている。動詞の過去を表す形式として‘-Ø-’がほぼ使用されず、‘-더-(-te-)’と‘-았-(-as-)’が用いられる分布である。‘-더-(-te-)’は一人称主語の場合、反復的・静的な動詞句とのみ使用され、動的な動詞句とは使用されないが、三人称主語の場合は反復的・静的のみならず動的な動詞句とも使用される。なお、‘-더-(-te-)’が使用されない一人称主語の動的な動詞句の場合には‘-았-(-as-)’が使用されている。このことから、本章では‘-았-(-as-)’と‘-더-(-te-)’が分布1において用法上、対立していることを主張している。

第5章では非会話文の平叙終止形における‘-Ø-’と‘-더-(-te-)’について論じている。‘-았-(-as-)’が使用されない場合で、地の文などが対象である。終止形における一人称主語と‘-더-(-te-)’の使用が限られているため、ここでは主に三人称主語について‘-Ø-’と‘-더-(-te-)’の比較を行っている。‘-더

-(-te-)’においては反復や習慣、背景を表す点があげられるが、これらを表さない三人称主語の‘-더-(-te-)’は、同じく三人称主語の‘-Ø-’との違いが曖昧になり得ることを指摘している。その根拠として、物語や日記の地の文の三人称主語の用例は証拠性(evidentiality)の点から‘-더-(-te-)’と‘-Ø-’の違いを説明することが困難であることをあげている。

第6章は‘-Ø-’、‘-더-(-te-)’、‘-앗-(-as-)’の全てが使用される場合について論じている。ここには接続形‘-니(-ni)’、間接話法の平叙終止形、疑問文の終止形、連体形が該当する。

まず、接続形‘-니(-ni)’においては、一連の過去の出来事を述べたり、後続節で説明を加えたりする場合は‘-앗-(-as-)’ではなく‘-Ø-’が使用される。‘-앗-(-as-)’が使用されるのは結果・状態を表す場合や後続節における命令・判断・主張などの理由や根拠を表す場合である。これらは発話時もしくは後続節の時点に関わりや影響を持つことから、‘-앗-(-as-)’がパーフェクトを表すと主張している。

間接話法の平叙終止形においては、‘-앗-(-as-)’が具体的な結果を表すだけでなく、間接的な影響を表す場合にも用いられることから、接続形‘-니(-ni)’の場合と同様、パーフェクトを表すことを指摘している。

疑問文の終止形では‘-Ø-’の修辞疑問の比率が高く、‘-앗-(-as-)’は通常の疑問の比率が高いことを明らかにしている。また、‘-더-(-te-)’の現代語と異なる特徴として、二人称主語の場合にも使用されることをあげている。

連体形に関しては、近世朝鮮語において特徴的と思われる‘-앗-(-as-)’を含んだ形式を中心に述べている。さらに、語源的に連体形を含む分析的な形式‘-ㄴ 즉(-n cuk)’、‘-ㄴ 고로(-n kolo)’、‘-ㄴ디라(-ntila)’をあげて、それらの用法を解説している。

第7章では‘-앗-(-as-)’を含むその他の形式として‘-아시리-(-asili-)’と‘-앗더-(-aste-)’を取り上げて述べている。

‘-아시리-(-asili-)’については、これと同じく過去と推測が関係する‘-리러-(-lile-)’と比較して論じ、近世朝鮮語では‘-아시리-(-asili-)’が「過去についての推測」を表し、‘-리러-(-lile-)’は「過去における推測」に用いられることを明らかにした。

‘-앗더-(-aste-)’については、‘-앗-(-as-)’と‘-더-(-te-)’のそれぞれの意味が分析できることを主張している。また、先行研究の見解とは異なり、過去パーフェクトを表すことを述べている。つまり、‘-앗-(-as-)’がパーフェクト、‘-더-(-te-)’が過去時制を表すというのが本論の意見である。

結論の第 8 章では本研究の要約と成果をまとめ、今後の課題について述べている。この研究の前提となった 3 つの分布に沿って成果をまとめると、分布 1 では新しい体系が用いられ、分布 2 と 3 では古い体系が用いられるということができる。ただし、分布 1 の体系も‘-더-(-te-)’が一人称主語と共に使用された場合の意味や、‘-더-(-te-)’と‘-았-(-as-)’との関係においては中期朝鮮語と現代朝鮮語とも異なる特色があることが認められる。また、分布 3 においては‘-Ø-’と‘-더-(-te-)’の対立が維持される中で‘-았-(-as-)’がパーフェクトを表している。‘-더-(-te-)’の変化に関しては、分布 1 で動的な動詞句に用いられる場合、現代語のような直接証拠の意味を表す形式へと変化し始めていることが確認された。

最後に、今後の課題として次の 3 つをあげている。まず、本研究で取り上げた時期の前後、つまり 17 世紀と 19 世紀の資料を検討し、本研究で述べた内容と比較する必要がある。また、筆写資料の研究、ならびに文学研究との連携が重要になると思われる。さらに、言語形式に関する課題として、終止形、接続形、連体形における変化の程度の違いについて、他の言語との対照も含めて考察することが必要である。

【審査の概要】

審査でははじめに高橋春人氏により提出論文の概要説明があり、その後、各審査委員との質疑応答が行われた。

本論文の内容について、審査委員が高く評価できるとした点には次のようなものがある。

(1) 従来、近世朝鮮語に関する研究は中期朝鮮語と現代朝鮮語の中間的な段階として結論付けられる傾向があった、本論文では近世朝鮮語の過去を表す接尾辞の共時的な特徴を詳細に論じ、中期語から現代語への変化の過程を明示的に記述している。

(2) 近世朝鮮語の文献資料を選定するにあたり、基準と条件を設定し、適切な資料を選び出している。また、資料を文献学的、書誌学的に慎重に扱っている点も評価し得る。

(3) 言語活動動詞とともに使用された諸形式を 3 種の分布において調査し、主語の人称の偏りを指摘するなど、従来言及されなかった近世朝鮮語の特徴をいくつか見出している。本論文における文献の選定、調査方法、そしてそれによって得られた成果は今後の近世朝鮮語研究の基盤となり得るものと評価し得る。

一方で、以下のような点が改善すべき点、あるいは検討を要する点として指摘された。

(1) 本論文の主要な用語のうち、定義が明示されていないもの、また混乱してい

るものが散見される。例えば、「証拠性、意外性、口語性、修辞疑問、完了」などである。これらの定義は論者によって異なることがあり得るので、定義を明確に示して論を進める必要がある。

(2) かなり多くの内容を読まないと結論が見えてこない構成となっているため、読み手は内容を理解するのに困難を感じる。序論、あるいは各章のはじめに内容の全体像を示しておくことが望まれる。

(3) 例文にはごく短い文、また文の途中を省略した文がある。読み手はそれらの文だけでは内容を十分に判断しきれないため、判断の根拠となり得る文脈を示す必要がある。

(4) 「～かも知れない」といった表現や「～など」の多用が見られる。前者の表現では結論が分かりにくく、後者では具体的な例の明示が求められる。これらは論文では避けた方が良いと思われる。

(5) 第5章の5.3.1.1と5.3.2.1の「‘-Ø-’と‘-더-(-te-)’の違いがみられないもの」は異なる形式の間で「違いが無いもの」と読み取れるため、誤解が生じ得る。改善案としては、質疑応答の中にあった「違いが見い出せなかったもの」といった表現が妥当である。

公開審査においては、以上のような評価すべき点、そして改善すべき点や検討を要する点が指摘された。高橋春人氏からは質疑に対して丁寧で詳しい説明がなされた。また、その場で答えられなかった点については今後慎重に取り組んでいく旨の回答が得られた。総合的には本論文が学位論文として学術的に非常に重要な成果を含んでおり、本学の博士学位論文の評価基準を満たしていることが認められた。

公開審査終了後、博士論文の審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が本学の博士学位論文としての評価基準を十分に満たしていることを確認し、高橋春人氏に博士(学術)の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。